

# 日本体操学会会報 Vol.19/2022.12

ごあいさつ

日本体操学会会長 後藤 洋子

令和4年11月12日、13日に日本体育大学を会場として日本体操学会第22回大会が3年ぶりに対面で開催されました。日本体育大学での開催は第1回大会、第10回大会に続き3回目になります。大会のテーマは「令和時代に求められる体操とは」です。第1日目は国立代々木競技場第二体育館で日本体育大学体操部の演技発表会を見学し、第二日目は日本体育大学世田谷キャンパスで、長年全国ラジオ体操連盟の理事長を務められた青山敏彦先生の基調講演と各種研究発表、シンポジウムが行われました。伝統を重んじて変わらない体操の良さがあるとともに、新しい事に挑戦する体操の楽しさがあります。参加者の皆様が一緒に動いて学び、学んで動くことによって、本大会が体操を楽しむ場となったと感じました。

新型コロナ禍の影響はまだまだ続き、収束の方向に向かってはいるようですが、実際の所はまだまだ不透明な状況です。そのような中で、学会大会を久しぶりに対面で実施することができました。学会大会をオンラインで開催するメリットも数多く有ることが分かってきましたが、実際に集って動いたりディスカッションしたりすると、改めて対面の良さを実感し、やはり対面には叶わないと思う場面が多々あります。参加された皆さまと共に、久々に対面で開催された学会大会を大いに満喫いたしました。

ここに学会大会の概要をお届けいたします。

## 日本体操学会第22回学会大会報告

第22回学会大会が、日本体育大学世田谷キャンパスにて対面で開催されました。

- 開催日 2022年11月12日(土):分科会活動、日本体育大学体操部第54回演技発表会  
11月13日(日) 基調講演、口頭発表、ポスター発表、シンポジウム等
- テーマ 令和時代に求められる体操とは
- 学会大会の内容(日本体操学会HP参照) <https://taisou.jp/data/22nd-programs.pdf>

## 分科会活動: キッズ、学校体育、中・高齢者

分科会活動はキッズ分科会・学校体育分科会・中高齢者分科会に会場が分かれ、それぞれのテーマで行われた。

<キッズ分科会>

運動遊び・体づくり運動指導者の澤井雅志氏から「楽笑!体操を子ども達に!」というテーマで様々な素材(紙・トイレットペーパーの芯など)を使った運動遊びの紹介があった。また筑波大学名誉教授長谷川聖修氏より、SDGsにもつながる体操の展開として使用済み牛乳パックを用



いた遊びの紹介があった。

#### <学校体育分科会>

神戸女子大学住本純氏より中学校体づくり運動領域の教材として「既存の体操を活用した教材作成に向けたフレームワークづくり」提案があり、ペアラジオ体操を元に、参加者が単元で生徒が活用できる様々な動きの展開例を考えるワークショップを行った。

#### <中高齢者分科会>

女子栄養大学金子嘉徳氏の進行で、厚生労働省「第2回健康寿命を延ばそう！アワード」を受賞した坂戸市ボランティア団体の活動紹介、多世代が交流しながら安全に楽しめる体操のワークショップ、中高齢者分科会活動報告があった。



## 日本体育大学体操部第54回演技発表会

大会1日目の夕方に日本体育大学体操部第54回演技発表会が国立代々木競技場第2体育館で開催された。今回は、日本体操学会の学会員のグループが日頃実践している体操について、実践研究発表として演技発表を行う企画が準備された。日本体操学会からは、「モダントレーニング研究会」「駿河台大学（体操演技同好会・鈴木慶子ゼミ）」「筑波大学体操部」「新潟大学リズム体操部」「健康体操教室ハローフレンズ イノア」「お〜るど・ボーイズ」の計6団体が発表をした。



日本体育大学体操部の洗練されたエネルギッシュな体操発表に加えて、学会員がそれぞれに創意工夫しながら指導している体操が発表され、特色が異なる各発表から体操領域が持つ多面性に触れることができた発表会であった。



## 基調講演

「これまでの体操人生を振り返る」と題して、青山敏彦先生がお話しされた。前半は日本体育大学での教職経験とデンマーク体操との出会い、後半は現在の体操について、ラジオ体操をどのように考え、取り組んでおられるか、今後の課題についてお話しされた。

学校や社会が多様化する現代、指導者は対象に合わせて楽しく動けるように考えることが大切であると述べられたことが印象的であった。さらに、現在は聴力障がい者の「ラジオ体操」についてどのようにしたら良いか、音楽を使った体操の意味について考えておられ、「皆さんはどのように考えますか」と宿題をいただいた。背筋の伸びたお姿で語られるご様子より、参加した私たちに生きる姿勢を教えてくださいました。



## 口頭発表・ポスター研究発表・ポスター実践報告

口頭発表は1題で「大学生を対象としたロコモティブシンドローム予防を目的とした体操試案に関する研究 - 靴下を用いた体操の介入を通して - 」に関する発表であった。靴下体操によって短期間の体操介入ではあったものの、片脚立ちによるバランス能力の改善が示されたことが結論として発表された。

ポスター発表は、まず研究発表6題について、各2分間のコンパクトプレゼンテーションがあり、その後15分間に各発表者と自由に意見交換を行った。さらに、実践報告10題についてもコンパクトプレゼンテーションがあり、その後は自由にディスカッションをした。研究・実践の対象は幼児から高齢者まで幅広く、内容は体操の作成・用具の開発・指導方法・体操音楽の制作・地域とタイアップした活動・体操授業の実践・体操実践による心理面を含めた効果・運動課題に関する記述・体操の動きの変遷等、バラエティに富んでいた。参加者もそれぞれの関心に沿ってあちこちで熱心にディスカッションが繰り広げられ、時間が足りないくらいであった。

## シンポジウム

「体操」「体づくり運動」の授業がある大学の、授業の現状と課題というテーマで4名のシンポジストによる実技内容の紹介があった。

<保育者養成の現場から考える一般体育>

常葉大学田村元延氏より、遊びの環境を構成しながら幼児の動きづくりや体づくりを促す運動材として新聞紙を用いた運動遊びの展開例の紹介があった。



<小学校体育の授業で実践している体づくり運動の内容>

新潟大学檜皮貴子氏より、短縄を用いた小学校中学年の「体ほぐしの運動」と「多様な動きをつくる運動」の授業展開例の紹介があった。



<身体に纏わる文化と科学の総合大学を目指す授業について>

日本体育大学小柳将吾氏より、「体づくり運動（体操）」の授業を通してリーダーシップや体育人として見本となる人材育成をねらいとした授業展開例（駆け足体操の指導）の紹介があった。



<教養教育としての大学体育授業における体操>

筑波大学堀口文氏より、教養体育履修学生を対象にした授業での運動が苦手な学生も取り組める





「スマトレ（スマートホンを活用したトレーニング）」の紹介があった。

各シンポジストの紹介後に質疑応答が行われ、参加した学生からは他大学の授業内容を体験して体操の幅が広がったことや今後の職業に今回の運動内容を生かしていきたいといった感想が多く寄せられた。

## 企画委員会 特別企画

「人生 100 年時代 ニッポンには“今”この体操が必要だ！」

多彩な運動プログラムや健康情報の発信がなされている現状に対し、多くの体操専門家が集う日本体育学会として今の時代に求められる体操を検討していく企画であった。具体的には、4～5人のグループ(4つ)で動きのモチーフを作成し、それを発表し合って体操の素案を作成した。さすがに体操専門家集団であり、さまざまなアイデア溢れる提案があった。今後は、中・高齢者分科会等で議論を重ね、鈴木大輔氏が担当している「NHK テレビ体操 令和5年2・3月分火曜日総合テレビ13時55分～の体操」内で放送していく予定である。日本体操学会として発信していく機会となるとよいと思った。



## 令和4年度日本体操学会理事会／総会報告

令和4年度日本体操学会総会が、9月11日(土)にZoomを活用して開催された。各委員会報告とともに第22回大会は日本体育大学で対面での開催で準備が進められていることが報告された。

